

2019年
(平成31年)

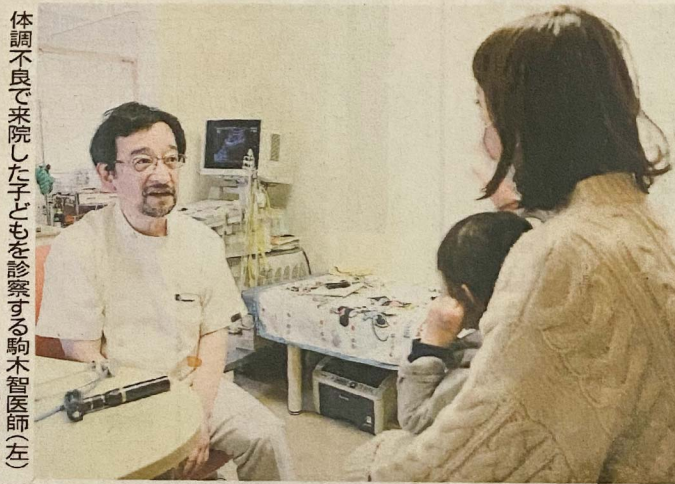
1月18日

金曜日



発行所
熊本日新聞社
〒860-8506
熊本市中央区世安町172
☎代表 (096) 361-3111
© 熊本日新聞社 2019年

医師 インフル感染対策は やっぱり基本 手洗い、うがい



体調不良で来院した子どもを診察する駒木智医師(左)

熊本市中央区

受験シーズンを迎えた中、県内はインフルエンザの大流行期に入り、医療機関には連日多くの患者が訪れている。感染リスクが高い中で診療に当たっている医師は、どう予防を

しているのだろうか。
【1面参照】
インフルエンザのウイルスは鼻や喉、目などの粘膜からヒトの細胞内に入ってくる。熊本市中央区の駒木小児科クリニックの駒木智

院長(57)は「とにかくウイルスを体内に入れないこと。顔付近に手を近づける前には必ず洗って」と話す。
駒木院長が冬場にインフルエンザを発症したのは10年前の開院以来1度だけという。

駒木院長が心掛けているのは、近くでせきををする人がいると10秒間、息を止める。ウイルスが入りやすい口ではなく鼻で呼吸するようにし、手を洗うまでは眼鏡や髪も触らない。マスクは有効だが「装着前のマスクも汚染されないよう、必ず手を洗って付けて」と助言する。

駒木院長は、仕事中はマスクをしないため、「完全にウイルスの侵入を防ぐことはできない」。だからこそ、

予防接種は必須。喉や鼻の粘液の中にはワクチン効果がある液性免疫があり、部屋を加湿したり、水を飲んで喉を潤したりして乾燥させないことも重要だ。

発症を抑える免疫力を維持するため、睡眠や食事をしっかり取り、ジョギングなど日頃の体力づくりも欠かせないという。

東区の庄野循環器内科医院では休日当番医だった13日、通常の3倍にあたる120人超の患者が訪れた。庄野信院長(49)はインフルの患者を診るたびに手を洗い、消毒用のアルコールジェルを付ける対応を徹底。うがいも斜め45度上を見ながら「あー」と声を出し、喉の奥まで洗う。

高校受験を控える娘の父親でもある庄野院長。「アルコール消毒薬は市販品もある。受験生がいる家庭などは使ってみては」と話す。やはりインフルエンザには、手洗いやうがいは、手洗いやうがいといった基本対策を徹底することが一番の予防策のようだ。
(林田賢一郎)